

岩に刻まれた鯨

―韓国盤亀臺遺跡の岩刻画―

金沢医科大学 平口 哲夫



盤亀臺 右方岩壁水面下に岩刻画がある。1990年7月30日筆者撮影。

一九八二・三年に真脇遺跡から遺物として多量に出土したイルカは、マイルカにしてもカマイルカにしても、すべて温暖種に属し、五月を中心とした春から初夏にかけての季節に西の方から能登沖に回遊してくる。したがって、比較資料を求めて、日本海沿岸の西方におのずと目を向けるようになった。

古代のハンター・フィッシャー

古代文化第二五巻第六号（一九七三）に国分直一先生（当時熊本大学教授）が「韓国考古小記」という稿を寄せ、その中で前年発見されたばかりの韓国盤亀臺岩刻画のことを紹介しておられる。この号を私は大学院在学中にたまたま購入していたので、あらためて読みなおしてみた。韓国『中央日報』（一九七二年

三月二二日）掲載のスケッチが引用されていて、陸獣類とともに鯨類が多数描かれている。国分先生いわく「海の動物としてはイルカがクジラと見られるもの、ウミガメが登場している。この岩刻画のこした人々が、ハンター・フィッシャーであったことはたしかであろう」。

先史時代からあった韓国捕鯨

真脇遺跡出土動物遺体の整理が一段落した一九八六年に、韓国考古学の権威、九州大学の西谷正教授に教えを請うたところ、東國大学から出版された報告書（黄壽水・文明大著『盤亀臺岩壁彫刻』、一九八四）の存在を知らせてくださった。さっそく書店に注文して手にいれた原書を見て驚いた。予想以上にすばらしい彫刻であり、鯨類や捕鯨船の様子が実に生き生きと描かれていたからである（韓国語のにわか勉強開始）。

この報告書は、美術的分析が中心で、鯨類の種については検討不十分という印象を免れない。この鯨類画を残した人たちはいくつかの種をはっきり区別して描いているようであり、鯨類の専門家の力を借りればもっと詳しく種の判定ができるに違いない。シンポジウム「日本海と鯨類」（一九八八）で鴨川シーワールドの鳥羽山照夫館長にお会いしたのをきっかけに、国際海洋生物研究所第二回研究修集会（一九九〇年二月）で「東アジアにおける鯨類の考古学的研究」と題して発表させていただいたが、このとき紹介した盤亀臺岩刻画は出席者に強烈な印象を与えたようである。その席で筆者に寄せられたご意見やその後の私

信によって得たご教示を参考に、鯨類画の種について私なりにできるかぎりの分析を試み、日本考古学協会第五六回総会（同年五月）ならびに日本海セトロジ―研究グループ第一回研究会（同年同月）で成果の一端を披露した。



韓国盤亀臺岩刻画（黄壽水・文明大 1994『盤亀臺岩壁彫刻』から転載、改変）

現地を訪ねたのは同年七月のことである。『韓半島沿海捕鯨史』（一九八七）の著者として有名な朴九秉教授（釜山水産大学）に案内されて、慶尚南道蔚州郡彦陽面大谷里のダム地に出かけた。岩刻画が発見されたのは一九七二年一月に生じた異常渇水期のことであったから、夏に訪れても水面下にあるためそれ自体は見る事ができないだろうが、地形環境の臨場感を得るだけでも意義があると思いついたのである。

盤亀臺は蔚山湾にそそぐ太和江の上流部に位置する。蔚山湾やその近海では、

近代に米国や日本によって捕鯨が盛んに行われ、盤亀臺岩刻画に描かれているようなセミクジラやコククジラが多数捕獲されている。盤亀臺岩刻画が発見されるまでは、韓国の捕鯨は日本統治時代に日本の影響ではじまったのだと一般に受けとめられてきた。ところが盤亀臺の鯨類画は、すでに先史時代に韓国で捕鯨が行われていたことを証明したのである。正確に年代をきめることはできないが、動物の表現様式が青銅器時代のものと通じるところがあるので、その時代に属するというのが有力な見方だ。日本では縄文時代晩期頃にあたるが、弥生時代まで下る可能性もある。徐福捕鯨伝説にも一石を投ずることになるのではないかと思うと愉快な気分になる。（セトケン文献抄録委員長）

参考資料

平口哲夫 一九九一、「朝鮮・対馬海峡沿岸の古代捕鯨」、日本海セトロジ―研究創刊号、二〇～二九頁

註

韓国文物研究院は二〇一〇年八月一七日、蔚山南区黄城洞の蔚山新港湾埠頭連絡道路敷地で新石器時代前期（紀元前六千～四千年）遺物層から、「鹿骨の矢尻が打ち込まれた鯨骨」二点を発見したと発表した。昌寧釜谷面飛鳳里遺跡の舟・櫂の出土や、盤亀臺岩刻画などの絵と照らし合わせて、当時の人々が鯨類を行なっていた証とみている。この「鹿骨の矢尻」とされた遺物は、日本で骨製尖頭器と称するものに相当する。この骨製尖頭器が刺さった鯨骨が発見されたことにより、盤亀臺岩刻画も新石器時代前期まで遡る可能性が出てきた。